

第3章 まとめ

- 学修スペースを整備する際の施設画面上の留意点と運営上の留意点 -

本章では、第2章で取りまとめた国内外の先行事例調査結果から、今後、各大学が学修スペースを整備する際の施設画面上の留意点と運営していく上での留意点を整理した。

なお、本章で示す留意点は、「国立大学等設計指針（平成26年7月）」に示された国立大学等の施設を設計する際の基本的考え方や留意事項等を補完するものであり、学修スペースの整備に当たっては、「国立大学等設計指針」及び本留意点に配慮することが重要である。

施設画面上の留意点

1. 学修活動を習慣化し、多様な交流を創出する配置計画

学修スペースの配置計画については、講義棟や学生支援施設に隣接する等、学生動線を踏まえた計画とすることが重要である。

（国立大学等設計指針 第2章 1. 交流促進への配慮）

2. 適度な相互刺激をもたらす空間構成・施設機能

学修スペースの空間構成・施設機能については、ガラスの間仕切りを採用する等、利用者が互いの学修活動に刺激を受ける環境とすることが学修効果を高める上で重要である。

（国立大学等設計指針 第2章 設計する際の留意事項 能動的学修支援スペース）

3. 空間構成・施設機能のフレキシビリティ

学修スペースは、利用者の多様な学修形態に柔軟に対応できるフレキシブルな空間とすることが重要である。

（国立大学等設計指針 第2章 3. 可変性の確保）

運営上の留意点

4. 利用者や運営部門による整備計画への参画

学修スペースの計画・設計段階において、利用者や運営部門等を含めた検討体制の構築が重要である。

（国立大学等設計指針 第4章 第2節 2. 推進体制の構築）

5. 効果的な授業・学修活動への人的サポート

学修スペースの利用を促進し、学修効果を高めるためには、活動内容に踏み込んだサポート体制の充実が重要である。

（国立大学等設計指針 第4章 第6節 2. 施設の評価とフィードバック）

6. 長期的視点に基づく計画と継続的な改善の試み

学修スペースの施設管理・運営については、長期的視点に基づいて計画し、整備後は利用状況に応じて継続的な改善を行うことが重要である。

(国立大学等設計指針 第4章 第6節 2. 施設の評価とフィードバック)

7. 学修スペース計画の展開

学修スペースの整備の過程で得られた知見については、今後の計画に活用できるよう学内外で共有していくことが重要である。

(国立大学等設計指針 第4章 第6節 2. 施設の評価とフィードバック)

		国内事例										海外事例					
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
		小樽商科大学	埼玉大学	千葉大学	東京工業大学	九州工業大学	国際教養大学	立教大学	明治学院大学	中部大学	同志社大学	立命館大学	University College London	King's College London	University of Warwick	University of Manchester	University of Sheffield
2章掲載ページ		5	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25	27	29	31	33	35
3章掲載ページ	学修スペース整備の際の留意点																
39	1. 学修活動を習慣化し、多様な交流を創出する配置計画					●	●	●	●	●	●	●				●	●
40	2. 適度な相互刺激をもたらす空間構成・施設機能		●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
41	3. 空間構成・施設機能のフレキシビリティ	●	●	●		●		●	●	●	●	●	●	●	●		
42	4. 利用者や運営部門による整備計画への参画	●	●	●	●	●				●	●	●	●			●	
44	5. 効果的な授業・学修活動への人的サポート	●		●		●	●		●	●	●				●		
45	6. 長期的視点に基づく計画と継続的な改善の試み			●	●	●		●		●	●		●	●		●	●
46	7. 学修スペース計画の展開	●		●		●	●		●		●	●	●		●	●	●

施設画上的の留意点

学修スペースを整備する際には、配置計画や、空間構成・施設機能について以下に示すような施設画上的の留意が必要である。

【留意点 1】学修活動を習慣化し、多様な交流を創出する配置計画

- 学修スペースの配置については、門やエントランスからのアクセスと共に、講義棟や学生支援棟、福利厚生施設等との位置関係に配慮し、学修活動が学生の一日の活動の流れの中心となり、活動を接続する中で多様な交流が生まれるように工夫することが重要である。

学修スペースの配置計画の事例を表 1 に示す。

表 1 学修スペースの配置計画

大学名 学修スペース	主な 利用用途	設置場所 (延床面積)	配置の狙い・効果
九州工業大学 インタラクティブ学習棟 MILAiS	授業/ 授業外	講義棟エリアに 1 棟平屋 (411.51 m ²)	福利施設や他の学修スペース（ラーニングアゴラ棟）にも近接している。学生の動線と、他の学修スペースと連携した学修活動の展開に配慮がされている。
国際教養大学 能動的学修支援センター	授業外	図書館棟 2 階 (図書館全体：3984.19 m ²)	90%の学生が居住するキャンパス全体に、学生が目的に応じて学修できる場所を確保することを目指している。
立教大学 メーザー・ラーニング・コモンズ	授業外	メーザーライブラリー記念館（新館） 2 階・3 階 (908.95 m ²)	キャンパス導入部に配置することで、学内外の利用者がアクセスしやすくなり、他大学の学生や卒業生を交えた学修活動の活性化につながっている。
明治学院大学 横浜校舎図書館	授業外	図書館棟 (図書館全体 3874.88 m ²)	1 日の中で繰り返し利用しやすいようにキャンパスの中央に位置している。学びの習慣化と深化を促す狙いがある。
中部大学 不言実行館 ACTIVE PLAZA 「コモンズセンター」	授業外	学生支援センター棟 1・2・3 階 (不言実行館全体 5613.08 m ²)	学生支援棟は、キャンパス中央に位置し、福利施設や学生ラウンジと近接し、学生が活動拠点として利用できるように配慮。2 階のベデストリアンデッキで講義棟等と接続される。
同志社大学 良心館 「ラーニング・コモンズ」	授業/ 授業外	講義室・教務センター・福利厚生施設 等の複合施設 2・3 階 (2550 m ²)	建物の中央に位置し、授業の前後に活用できるように配慮されている。ラーニング・コモンズは建物内外から、内部での学習活動が窺えるような構成になっている。
立命館大学 大阪いばらきキャンパス (OIC)	授業/ 授業外	A、C 棟（学舎棟）の 1・2・3 階 コンコース (最大幅約 18m、長さ約 200m)	点在するコモンズを結ぶコンコースには多様なコミュニケーションを促す様々な仕掛けがあり、主動線であると同時に、自体も学修スペースとして機能している。
University of Manchester The Alan Gilbert Learning Commons	授業外	学部共通エリアに 4 階建て (5500 m ²)	全学共通エリアの管理本部近くにメインライブラリーと向かい合う位置に配置。完全ペーパーレスの図書館として整備されており、学生はメインライブラリーと使い分けている。
University of Sheffield The Diamond	授業/ 授業外	学部共通エリアと工学部エリアの境界に 6 階建て (19500 m ²)	全学をあげた学際研究を促す取組の舞台として先行整備された。図書館、レクチャーシアター、学修スペースは全学共有、研究・実習スペースが工学部で利用されている。

【留意点2】適度な相互刺激をもたらす空間構成・施設機能

- 学修スペースの空間構成・施設機能については、利用者同士が互いの学修活動から適度な刺激を受けつつ、集中して作業に取り組めるよう、視認性とエリアごとの仕切り方を調整することが重要である。

開放的な大空間や、透明な間仕切りの採用等により、利用者が互いの学修活動に刺激を受け、学修活動の質を高め合うことができる。また、学生に人気の高いファミリーレストラン風の什器を整備したグループ学修エリアは、適度にプライバシーが保たれ、学修活動に集中することができる。

具体例

- 緊張感や他者への配慮をもたらす大空間
- 他のグループの活動に刺激を受けられる透明な間仕切り
- 落ち着いてグループ学修に取り組めるファミリーレストラン風のグループ学修エリア



活動が相互に見えるようエリアごとの間仕切りはほとんど設けていない

(同志社大学 良心館ラーニング・commons)



実習スペースはガラスで仕切られ（写真手前）外から活動の様子が見える

(シェフィールド大学 ザ・ダイヤモンド)



適度にプライバシーが保たれ、居心地の良いファミリーレストラン風のエリア

(ユニバーシティカレッジロンドン クルシフォーム・ハブ)

【留意点3】空間構成・施設機能のフレキシビリティ

- 学修スペースの空間構成・施設機能については、多様な学修活動が自由に展開されるようフレキシビリティを確保することが重要である。

学修スペースを多様な学修活動に対応させるためには、空間を作りこみ過ぎず適度なゆとりを持たせること、可動性の高い ICT 機器や什器等を備えること等のフレキシビリティが求められる。PC 等の ICT 機器を学修スペース内で自由に利用できるように、ネットワークや電源の配置を工夫することも重要である。

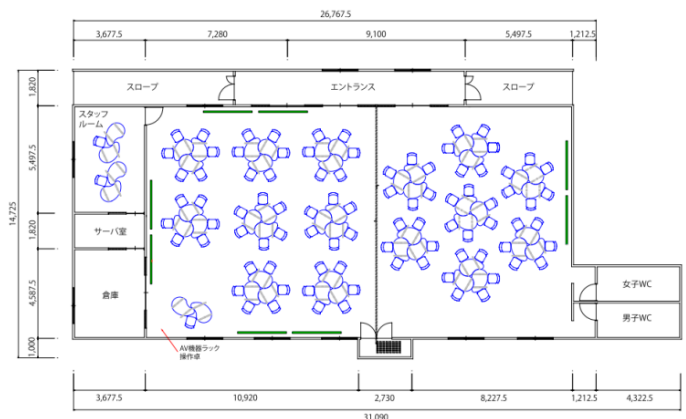
具体例

- 多様な学修活動が可能なゆとりのある広さの空間
- 活動に応じた再構成が可能な間仕切りや可動式の ICT 機器や什器等
- 移動を妨げないよう、電源や LAN ケーブルを天井や床下に埋め込み配置
- 教員や学生が自由に活動場所を選択できるように、無線 LAN や、豊富な電源を整備



追加整備にも柔軟に対応できるよう空間に余裕を持たせている

(中部大学 コモンズセンター)



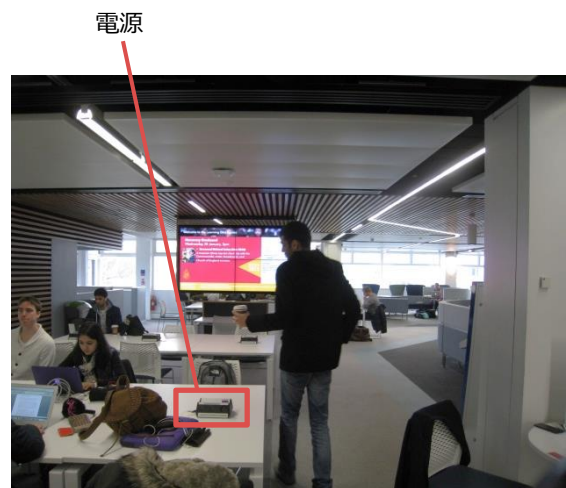
空間に固定的役割を設けず、什器はすべて可動式である

(九州工業大学 MILAIS)



学生が什器を移動させて思い思いの場所で学修している

(マンチェスター大学 アラン・ギルバート・ラーニング・コモンズ)



全館で無線 LAN が利用でき、ほぼ全席に電源を配置

(ウォーリック大学 ラーニング・グリッド・ルーツ)

運営上の留意点

学修スペースの整備では、検討体制や、人的サポート等、整備後の維持・改善や、学修スペース計画の展開について以下に示すような運営上の留意が必要である。

【留意点4】利用者や運営部門による整備計画への参画

- 学生の主体的な学修活動を促進するためには、活動の当事者である学生や、学生の学修活動の現状をよく知る教員等が整備の検討に参画し、学修スペースの使い方、そこでの取組を具体化することが重要である。

学修スペースの利用者（学生・教員）や運営部門のスタッフ等、広く関係者が参画した事例について表2に示す。

表2 学生・教員・運営部門の整備計画（学修スペース開設まで）への参画状況

大学名	学生が 検討会議に 参画	学生向け ワークショップ の開催	学生 アンケートの 実施	教員が 検討会議に 参画	教員意見を 運営部門が 集約	運営部門が 検討会議に 参画(※1)	備考
小樽商科大学			●	●		●	FD(※2)を担当する教育開発センターが企画し、整備後は運営を担当
埼玉大学			●		●	●	学部生と高校生の学修活動時のPC、図書館利用に関する調査を実施
千葉大学				●		◎	教員・職員の合同組織でプロジェクトチームを形成し、検討を行った
東京工業大学				●		●	学修スペースで実施するカリキュラムの検討委員会に全学類の教員が参加
九州工業大学					●	●	全学支援組織学習教育センターが検討に参画し、教員意見を大学施設課の設計に反映
中部大学				●		◎	建設検討委員会と活性化委員会の2本立てで計画を検討
同志社大学				●		◎	全学向けFD、学習支援を担当する学習支援・教育開発センターを中心に企画
立命館大学		●		●		●	キャンパス開設準備委員会に各部から選ばれた教職員が参画
University College London	●	●		●		●	設計事務所が学生ワークショップを開き、学生意見を集約して検討会議で発表
University of Manchester	●					●	検討初期から学生代表が検討会議に参画し、学生の意見に重きを置いた整備を実施

(※1) ◎は学修スペースの検討組織が、学修スペース運営組織に引き継がれた事例

(※2) FD(ファカルティ・ディベロップメント)：全学的に、あるいは学部・学科全体で、それぞれの大学の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修を行うこと

- **学生の参画について**

学生が検討段階から参画することにより、学生の学修スタイルを直接反映した整備計画が可能になる。国内事例では、学生が開設までの検討会議に直接関る事例はなかったが、学生の学修活動の実態をよく知る教職員が学生に代わって検討を進めたという回答が得られた。整備後には、運営スタッフとして学生が学修スペース運営会議に関する事例もある。また、学生意見を積極的に取り入れた整備を行うことで、学生の学修スペースに対する愛着が高まり、滞在時間が長くなるという効果もあらわれている。

- **教員の参画について**

学生の主体的な学修活動の促進には、教員の理解や協力が不可欠である。FD（ファカルティ・ディベロップメント）を目的の1つとしている学修スペース整備の事例では、授業との連携や授業内容にまで踏み込んだ検討が整備後も継続していくことが重要であり、運営部門と教員が協力体制を構築することで学修スペースの活性化や今後の施設整備の展開に影響を与えていることが分かる。

- **運営部門の参画について**

計画・設計プロセス時に運営まで視野に入れた検討体制を構築することは、整備後の学修スペースの活性化に有効である。

多くの事例で運営部門が検討に参画しており、整備検討時に教職員合同の検討委員会が立ち上がり、整備後そのまま運営組織として継続している事例や、学内で前例のない新たな学修スペースの検討を契機に、部門を超えた学修環境を向上するための取組が進んだ事例などもみられた。

【留意点5】効果的な授業・学修活動への人的サポート

- 学修スペースの運営において、学修活動の効果を高めるためには授業内容や学修活動に踏み込んだコンサルティング等を行える人的サポートの充実が重要である。

学修スペースの施設機能を最大限活用し、学修活動の効果を高めるためには、学修スペースの管理や ICT 機器等の利用サポートはもとより、学修活動の内容まで視野に入れた人的サポート体制を構築することが重要である。教員の授業計画への支援や、学生の学修相談、アカデミック・スキル向上を目的とした人的サポートは、多くの大学で取組が進められている。

また、スタッフが教員や学生の活動に深く関与することで、利用者ニーズや課題を知り、学修環境の改善につなげることができる。

各大学の調査事例で取り上げた、学修スペースと関連して提供される授業・学修活動への人的サポートについて表3に示す。

表3 先行事例における学修スペースに関連した授業・学修活動への人的サポート

学修スペース	大学名	教員を対象とした授業支援	学生を対象とした学修支援
3号館・5号館 アクティブラーニング（AL）教室	小樽商科大学	授業方法相談受付をALサポートセンターが担当	
アカデミック・リンク	千葉大学	コンテンツ制作室にて教材作成支援	院生を専門分野ごとに配置 教員のオフィスパワーを館内で開催
インタラクティブ学習棟 MILAiS	九州工業大学	授業方法相談受付	
能動的学修支援センター	国際教養大学		学生による個別学修支援 (アカデミック・スキルや語学学修)
横浜校舎図書館	明治学院大学	「授業内図書館サポート」 授業内容に沿った情報探索スキル習得のため、授業内容、進行の相談から授業実施までサポート	院生、TAによる個別学修支援
不言実行館 ACTIVE PLAZA コモンズセンター	中部大学		教員をコモンズコンシェルジュとして配置
良心館 ラーニング・コモンズ	同志社大学	学生の質問内容を学習支援検討部会にて委員を務める各学部教員へフィードバック	学習科学の見識を持つ教員がアカデミック・インストラクターとして常駐、学生スタッフ（大学院後期課程を中心）もアシスタントスタッフとして配置
Teaching Grid	University of Warwick	授業方法相談受付、模擬授業ワークショップ開催	

● 教員に向けた授業支援

学修スペースの整備を授業改善につなげるためには、学修スペース導入時にそこでの授業の内容・目的を担当教員と共有し、授業の効果を高めると同時に、教員が授業を行う上でなるべく負担を感じず、効果を実感できるような施設機能の整備が必要である。そのためには、整備前後に課題意識や ICT リテラシー、マルチメディアリテラシー等に関するきめ細やかなヒアリングを行う等、教員自身が使いこなす、授業内容や学生とのコミュニケーション向上につなげられるようにすることが重要である。

具体例

- 教員のニーズや ICT リテラシー、マルチメディアリテラシーに応じた使いやすい施設、ICT 機器や什器等の導入
- 授業計画への支援（模擬授業、授業形態やスペース・ICT 機器活用に関するコンサルティング等）
- 整備内容と授業評価の紐付

● 学生に向けた学修支援

学生への学修支援は、大学院生や学部生によるピア・サポート（学生同士の相互支援活動）を活用している事例が多いが、学生の自学自習を促す学修スペースに専門的知見を有するスタッフを配置し、専門性の高い学修サポートを受けられるエリアを設けている事例もある。また、学生が相談場所に迷わず、いつでも相談できるように相談窓口を一本化し、一日の活動の中で利用しやすい場所に設置する等、相談の敷居を下げ、サポートを利用しやすくするなどの工夫も有効である。

具体例

- 学修スペース内に学修支援エリアの設置
- 相談窓口の一本化

【留意点 6】 長期的視点に基づく計画と継続的な改善の試み

- 学修スペースの施設管理や運営においては、長期的視点に基づいて計画し、整備後も利用状況に応じた改善を継続的に行うことが重要である。

学修スペースの整備後、整備前の目標が概ね達成された際にも、学修活動の発展や、学内ニーズに対応するため、または学修環境の維持・向上のために様々な運営上の工夫を重ねていく必要がある。施設管理・運営計画を整備後の変化を見込んだ長期的な視点で計画することにより、整備後の学修スペース利用や業務の効率化につながる。

整備後の課題としていくつかの大学から寄せられた回答を元に整理すると、長期的視点が重要である点は、主に以下の 2 点である。

● 学修スペースの利用用途について

利用者や、利用用途の範囲については学修スペースの特性を踏まえた十分な検討が必要であり、利用用途を幅広く想定して対応することで、学修スペースの利用効率を向上させることにもつながる場合がある。学外利用の可能性を検討することや、学生数に関する調査を実施することが重要である。

● 清掃、什器等の管理

学修活動が活性化し利用頻度が高い学修スペースほど、メンテナンスが課題になる傾向がある。清掃や什器等の交換については、多くの大学がコスト面の課題として捉えている。利用頻度を踏まえた管理計画と予算化が必要である。

整備後の改善事例としては、利用者の声を反映したレイアウトや什器等の調整が中心である。利用者意見の収集にはアンケートや、サポートスタッフへの直接相談等があった。学修スペース設置当初は、試用期間やエリアを設け、利用状況や課題を反映した調整を経て、本格稼働を開始した事例も見られた。利用者の活動状況を把握し、学修活動への効果が高いと考えられるレイアウトや什器等を採用することで効率的な設備投資につなげることができる。

具体例

- 試用期間・エリアを設定し、調整を経て本格稼働
- 利用者ニーズを受けて、レイアウトを変更（グループ学修室ごとの席数、静寂空間と会話可能な空間の割合等）
- サポートスタッフが学生の移動動線について施設課に報告し、通路や階段を追加整備

【留意点7】学修スペース計画の展開

- 学修スペース整備の計画や整備内容については、今後の整備計画にその知見を活かせるよう資料等に整理し、関係者各位に共有し、学内外に展開していくことが重要である。

調査対象として取り上げた学修スペースは、今後の学修スペース整備における先進的な取組であり、学生、教職員、建設業者等の多様な関係者に対して、学修スペース設置の意義や整備の過程で得られた知見を広く共有・継承していくことが、今後の学修スペースの進展のために必要である。そのためには、学修スペースの整備担当者と運営担当者が協力して、計画・設計コンセプトや整備後の課題等の整理を行うこと、学内外の関係者との情報共有の機会を設けること等が有効である。

調査対象の多くの大学では、大学間で協力し、他大学への視察や実務担当者の合同勉強会等に積極的に取り組んでいる。学修スペース整備や当該学修スペースにおける学修活動、学修スペース整備の評価手法等について、組織の枠組みを超えた情報交換により、学修環境の展開と取組の発展が期待される。

具体例

- 学修スペースのモデル整備事例としてキャンパスマスタープランで紹介
- 計画プロセスの共有（学修スペース整備プロジェクトにおいて、プロジェクトマネージャーによる整備計画ブログの発信等）
- 学修スペース運営担当者有志の勉強会
- 学生ワークショップ活動の様子を校内掲示
- 学外有識者を招いた評価委員会の設置
- 先行事例の視察